

スクリブルにみる表現の根

奥 美佐子

I はじめに

What Children Scribble and Why. 4歳から8歳の子どもの作品を分析したローダ・ケロッグの疑問であり、1955年に刊行された著書の題名である。ケロッグはその後ゴールデンゲート幼稚園協会の協力によって2歳児のスクリブルを大量に入手したことをきっかけに研究に新たな展開を迎え、研究対象を2歳から8歳の子どもの間に拡げて世界中の子どもの作品約100万点を分類し『なぐり描きの発達過程』を著すことになる。しかし現在も『児童は何をスクリブルするかそれは何故か』という疑問についてはいまだ解きえぬ謎を抱えていて興味がつきない。ケロッグが2歳児のスクリブルとの出会いを契機にスクリブルにおける発達的な意味を理解したことには多くの示唆を含む。2歳児という時期は人の表現活動における発達的なエポックではないかと考えるからである。

筆者は2歳児の表現行為に興味をもち、保育園に通う2歳児たちが園やその周辺でするさまざまな遊びに注目、1994年から子どもの表象活動のさまざまな様相を現象面から採集し始めた。場やものにかかわる行為、子どもが好む場、音や音楽とのかかわり等、そこには2歳児の造形的表現や音楽的表現の芽が存在している。表現の方法は異質でも表現の根はひとつと言う。では、2歳児の造形的表現と音楽的表現の根とはどこにあり、いったい何なのか。ケロッグの問いをなぞるような問題を解きたいと考えた。

「リズムに乗りやすい子どものスクリブルはリズムカルで楽しい」「体のバランスの良い子どものスクリブルは安定している」。0～2歳児クラスの保育者から現場で耳にする言葉である。単に現場の通説であると聞き流すことも可能だが、毎年0～2歳児の集団を保育している保育者の気づきは観察の結果として無視できないものである。ここから推察できる表現の根は子どもの身体であろう。本研究は2歳児の造形的表現の現れとしてスクリブルを採択、音や音楽を特に好む子どもを特定して彼らのスクリブルに共通した特性を選り出し、共通の傾向をもつ子どもたちの表現の根を身体性に求めようとするものである。本稿は1995年度にK保育園に在籍した2歳児20名中上記条件に合う5名の子

どもを対象にしたもので、以後継続研究するための予備調査的位置付けを担うものであることをことわっておきたい。







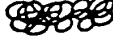

調査に先立ち、2歳児前後の子どものスクリブルの特質をあげることにする。

II 2歳児とスクリブル

1. 運動快感か視覚的快感か

スクリブルはどこからくるのかという疑問に対してローダ・ケロッグは「長い間、幼児たちがスクリブルすることから得る基本的な喜びは動作によるもの、あるいは“運動快感”と考えられてきた。それは視覚的快感が基本だと言い直してよいのである」また「スクリブル動作の視覚的刺激は、視力や照明よりもはるかに重要だ」と記している。¹⁾ケロッグは、スクリブルが運動能力に導かれてさまざまな線や形態を発達的に造るという説を、スクリブルの行為においては視覚的刺激が優先するという主張に置き換えた。また、彼女は2歳児あるいは2歳以下の子どものスクリブルから基本的スクリブル(表1)と呼ぶ20種類の形を抽出した。これらについて「基本的スクリブルとは2歳ある

表1 基本的スクリブル

スクリブル1		点
スクリブル2		単縦線
スクリブル3		単横線
スクリブル4		単斜線
スクリブル5		単曲線
スクリブル6		複縦線
スクリブル7		複横線
スクリブル8		複斜線
スクリブル9		複曲線
スクリブル10		うねうね開線
スクリブル11		うねうね閉線
スクリブル12		ジグザグあるいは波線
スクリブル13		単輪線
スクリブル14		複輪線
スクリブル15		渦巻線
スクリブル16		重なり円
スクリブル17		複円周
スクリブル18		広がり円
スクリブル19		単交円
スクリブル20		不完全円

ローダ・ケロッグ『児童画の発達過程』より p.19

いはそれ以下の幼児の作る20種類の形のことである。これらの動作は各種の筋肉緊張の様式を示すもので、視覚的ガイダンスが必要なわけではない。2歳児は眼によるコントロールなしにすべてのスクリブルを作れる²⁾とし、自ら視覚的快感が基本だとする3歳児以上のスクリブルと区別している。ケロッグの言うスクリブルにおける発達的な意味の理解とは、2歳児以下の子どもの作品に運動感覚に起因する20種類の基本的スクリブルを見いだしたことであった。

2. 身体と感情

W・グレッツィンゲルは「小さな子どものなぐり描き」は「運動性によって規定されている³⁾と指摘している。これは前述のケロッグが2～3歳以上の幼児のスクリブルにおいて否定した見解であり、2歳あるいはそれ以下の子どものスクリブルにおいて発達的な意味をもって認めたものであった。2歳あるいはそれ以下の子どものスクリブルについて同様の視点であるかに見える。グレッツィンゲルは子どものなぐり描きを並列・変化・十字・散布の原本的な装飾法に対応した。子どもはこの4つの原則に当てはまる形状のなぐり描きをし、この4つの形状は子ども自らの身体と世界のかかわり方を表すという。2歳児以下については「なぐり描きの根源的現象は、おとなの文字を装った、いくらか後の発達段階に属する、あの良く知られたジグザグの線では全然なくて、円環運動・渦巻・糸毬なのです。したがってそこから、子どもの手が〈回転的〉空間感情をもっており、それ故その

手はいわば回転モーターに導かれているのだと結論⁴⁾（図1参照）している。子どもは何をスクリブルするのか、グレッツィンゲルは身体性と原初的感情を表すものとして「なぐり描きは乳児の声音です。対象もなく言葉をもなしません、生のリズムそのものです⁵⁾と記している。空間構成の基本となる記号的な位置付けと生のリズム・身体が存在を示すもの、小さな子どもたちのスクリブルの解釈ではここに二者の相違がある。

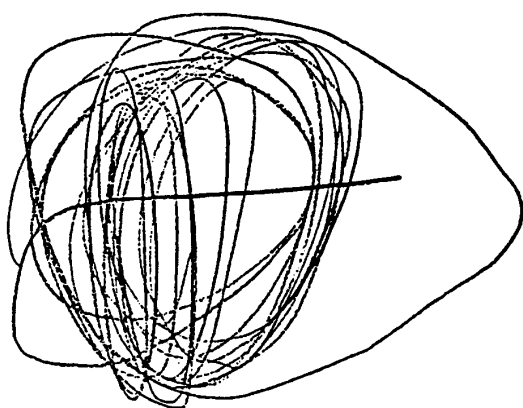


図1 根源的渦巻 2歳

『なぐり描きの発達過程』より p.30

3. 2歳児という時期

2歳児期以前のスクリブルに、ローダ・ケロックは基本的スクリブルを見だし、W・グレッツィンゲルはなぐり描きの根源的現象以前の回轉的空間感情を捉えた。

Ph・ワロン、A・カンビエ、D・エンゲラール等は子どもが描く人物表現を中心に研究を進め、初期の人物表現の発達をより理解するために、線画がどのように分化していくかを詳しく示し、全体の構成という角度から子どもの表現の仕方を考察した。この研究で示された3つの初期構造「原形タイプ」の構造(図2)、「頭-胴体」構造、「胴体-脚」構造を示した。大ざっぱながら閉じた丸い形ひとつかあるいはそれらが複数隣り合っ

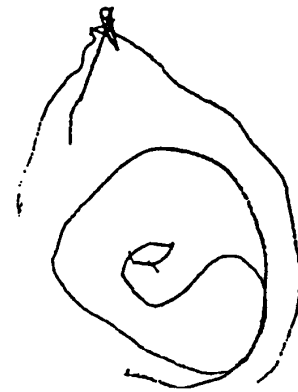


図2「原形タイプ」の構造2歳11か月
男児(茶のクレヨン使用)
『子どもの絵の心理学』より p.60

て描かれた「原形タイプ」の構造の出現時期が2歳児期で、これを最初の表現としている。⁶⁾

子どもの表現は0歳から連綿と続くものであると考えるが、前節のスクリブルにおける発達段階からは2歳児という時期にスクリブルが質的な転換期を迎えたと捉えられる。むしろ、2歳児以降のスクリブルを見るのと同様の方法では理解できない範疇に2歳児以前のスクリブルがあったと判断すべきであろう。2歳児期は描画表現がまさに変容していく時だと理解できるだろう。

Ⅲ スクリブルを読む

1. 音楽が好きな子どものスクリブルを調査する

I章で示した本調査の対象児5名を選択した経緯は以下の通りである。1995年4月～9月の期間、筆者は京都市内私立K保育園で同保育園に在籍する20名の2歳児が示す音楽的行動について調査した。子どもたちがそれぞれ好きな遊びをしているときに、どのような音楽的行動を自発的に示すかを観察したものである。調査の結果、歌を歌いながらダイレンジャーになって動く、2人の子どもが「あっついねー」「あっついねー」と同じ言葉をリズムをとって掛け合いを繰り返す、保育者と共に歌った歌を歌いながら遊ぶなどの姿を捉えた。これらの行為の出現頻度が高い子どもが5名あり、彼らは保育者の日常の観察からも「音楽が好きな子ども」であり、音楽的な情報が多い家庭環境にいる子どもたちであることがわかった。⁷⁾ この5名を「音楽が好きな子ども」と特定し、本調査の対

象として彼らが同年度中に描いたスクリブルを分析し、特徴の抽出を試みたい。

1) 調査の概要

調査期間 1995年4月～1996年3月

調査対象 京都市内私立K保育園 2歳児 5名

K児 H4年5月14日生まれ 男児

A児 H4年6月15日生まれ 男児

Su児 H4年8月20日生まれ 女児

Y児 H4年10月2日生まれ 女児（Sa児と双子）

Sa児 H4年10月2日生まれ 女児

調査方法 上記5名が1年間に描いたスクリブルを点、線、構成、ストローク、リズム等の観点から分析する。スクリブルの総数34枚。すべてB3サイズ。






2) 結果


2歳児が1年間に描くスクリブルはパス、マーカー、絵の具など数種の描画材が使用されている。また、個人によってスクリブルの枚数が異なるのが通例である。本研究の対象児5名のスクリブルから資料として選択したものは1名につき5～8枚、描画材はパスかマーカーを使用したものとした。合計34枚のスクリブルを資料NO.1～34の通し番号を付し、1枚ずつの特徴を以下に示す。被検児名、性別、生年月日、スクリブルの資料ナンバー、使用画用紙の状態（サイズは全てB3）及び描画材の種類と色、製作月日、スクリブルの特徴の項目を設定した。

[音楽が好きな子どものスクリブルNO.1～34とその特徴] ……後付け資料参照


- | | | | | |
|----------|-------------------|-------|----|--|
| K児（男） | 1. 白、マーカー・赤 | 4/12 | 1. | 画面下半分左右に横振れの線の塊が2か所存在する。画面上半分にかけて大きい横ぶれから全面にかけて回転し始める連続線へ連なる。ストロークは強く軽快。 |
| H・4・5・14 | | | | |
| | 2. 白・黄コビ、
パス・赤 | 5/22 | 2. | 白、黄の画面の境界を意識せず、ストロークの弱い、かすれたような線で楕円状の連続線を3～4回描く。 |
| | 3. 白、パス・黒 | 10/12 | 3. | 画面中央に横振れのやや長い線 |


- と縦振れの線の塊。その周りを囲うように縦振れの短い反復線で、強く早いリズムのものが多数。画用紙を回して描いているので向き不定。
4. 白、パス・緑 10/17 4. 弱くかすれたストローク。大小の閉じた円形が空間に飛び、横振れの線は十数本残るのみに減少。
5. 黄緑、マーカー・青 10/24 5. 連続した曲線が中央より画面全体に広がる。小円と短い反復線が楕円に近い糸毬がそれを取り巻くように配置される。
6. 白（仕掛け）、マーカー・緑 1/6 6. ぎこちない線で描かれた2つの円形の中と周りに、極短い縦横の反復線と細かいくくく形を繰り返して並べる。
7. 白（仕掛け）、パス・黄土色 1/22 7. 画面に貼った「いも」を示す茶色の色紙の上にマーキング。下中央の1つの「いも」を単線で囲い、その中を短い反復線で塗り込めるように埋める。
-
- A児（男）
H・4・6・15
8. 白、マーカー・赤 4/18 8. 楕円状にぐるぐる描いた線。中くらいの円形が4つあり、小円の嵌め込み、重ね描き、塗り込みのような反復線が多数。
9. 白・ピンクコンビ、パス・赤 5/22 9. 下半分の白部分には回転する円・反復線などを描く。ピンクの部分は画面の大きさを確かめるように三方を囲うように辺を辿る。
10. 白、パス・黒 10/12 10. 「顔」のようなフォルム、ジグザグの触知線、くくの繰り返しなどをバランス良く配置する。

11. 白、パス・赤 10/17 11. 画面左端に頭足人のフォルム、中央から右半分に呼吸線のような伸びやかな線、その線を4~5回なぞる。図の中に塗り込みがある小円を嵌め込む。
12. 黄、マーカー・赤 10/24 12. 画面中央に大きく回転した線。その中に縦・横・曲線などゆっくり描いた線を嵌める。周囲には細かい記号、回転・反復・ジグザグ・頭足人が浮遊する。空間における配置を感じさせる。
13. 白(仕掛け)、マーカー・赤 1/16 13. 仕掛けの部分に横反復による塗り。後ろの全空間は  という短い線の流れで秩序あるリズムで満たしている。
14. 白(仕掛け)、パス・黄土色 1/24 14. 線遊びのように仕掛けを辿り、「いも」を囲う。囲った中に小円や点、十字を嵌め込む。呼吸のようなゆったりした線と脈拍のような細かい記号が組み合わせられる。
15. 白、パス・オレンジ 2/19 15. 画面の空間を囲うように、区切るようにヘビのような曲線がリズムミカルに浮遊する。流れる線の間、ジグザグの触知線、点、  など嵌め込む。
-
- Su児(女) H・4・8・26 16. 白、マーカー・緑 4/18 16. 画面中央部に大きく楕円のような線。画面左上から右下を結ぶ線対称の位置に細かい  の反復線の集積した塊が存在する。
17. 白・ピンクコンビ、パス・赤 5/22 17. 画面中央左寄りに閉じない円。それを馬蹄形に囲むように、 の短い反復線、小円、点が密集す

- る。
18. 白、パス・黒 10/12 18. 左端に人の顔のようなフォルム。画面の左下隅を起点に右へ直線、右上方に流れるように  の小反復が連続して並ぶ。
19. 白、パス・ピンク 10/17 19. 画面全体に大きく顔のようなフォルムがある。下方に中くらいの円と縦の反復線を嵌め込む。
20. 水色、マーカー・青 10/24 20. 画面左から右端に向かって記号のように細かい線を並べる。一定のリズムで繰り返し10段と半分の並びが2段で空間を埋めた。
21. 白(仕掛け)、マーカー・ピンク 1/16 21. 3か所の仕掛けにマーキング。画面右端に画用紙の縁に添って十字を並べる。仕掛けのない空間を選ぶように大小の円の組み合わせと嵌め込み。
22. 白(仕掛け)、パス 1/20 22. 「いも」を線で囲い、「いも」の形の凹みのある部分から強く塗り広げる。一か所は完全に塗って囲んだ。
23. 白、パス・オレンジ 2/19 23. 5か所をマーキング。前回の「いも」と同様な反復線による塗り込みがそれぞれのマークに面的になされる。

Y児(女)
H・4・10・2

24. 白、マーカー・青 4/18 24. 軽快な螺旋状の線が連続して画面を2段に横切る。空間の空き部分に点や小さい反復線が飛ぶ。
25. 白、パス・黒 10/12 25. 左右にくねるきれいな曲線が画面全面に左右に流れる。  の記号、反復する短線がくねる曲線に重なり、点は浮遊する。

26. 白、パス・ピンク 10/17 26. 画面左はかすれた線の円錯画。右に2か所糸毬が集積したような塊が存在する。
27. 白、マーカー・赤 10/24 27. 空間の中央に反復線と曲線が集まる。その周囲を長短の直線、回転する小円が取り巻くように浮遊する。
28. 白 (仕掛け)、マーカー・ピンク 1/16 28. 3か所の仕掛けにマーキング。他の空間には上から下に向けて跳ねるような短い線を、仕掛け以外の空間を縫うように横に並べて埋める。
29. 白 (仕掛け)、パス・黄土色 1/22 29. 仕掛けにはほとんど反応せず、緩やかな回転の曲線を大きく画面に描く。曲線の中に回転した小円が飛び、画面下方一列に同様の糸毬が並ぶ。
30. 白、パス・オレンジ 2/18 30. 画面中央に大きく回転する渦巻。それを囲うように画用紙の形に誘発されたような四角いフォルムを描く。四角の線上、渦巻と四角の間の空間を  のような直線の反復で埋める。
-
- Sa 児 (女) H・4・10・2
31. 白、パス・黄緑 10/17 31. 弱いストロークで画面中央から上へ、横振れの線から始まり大きい曲線へつながる。
32. 黄緑、マーカー・青 10/24 32. 画面の3か所に中位の回転する糸毬のような連続曲線の塊が存在する。上下の短い反復線で画面の四隅にマーキングする。
33. 白 (仕掛け)、マーカー・緑 1/16 33. 仕掛けに軽くマーキング。左下方に回転する小さめの糸毬があり、

そこからひとつの仕掛けを囲うように回転する円形の曲線を描く。それに添うような点と触知線を思わせるジグザグ線が存在する。

34. 白、パス・
オレンジ

2/19

34. 左右に大きく伸びる緩やかな反復線。その上をかき消すように縦の短めの反復線が走る。この反復線は触知線を思わせる。

以上、対象児のスクリブルの特徴を可能な限り言葉に変えたものである。

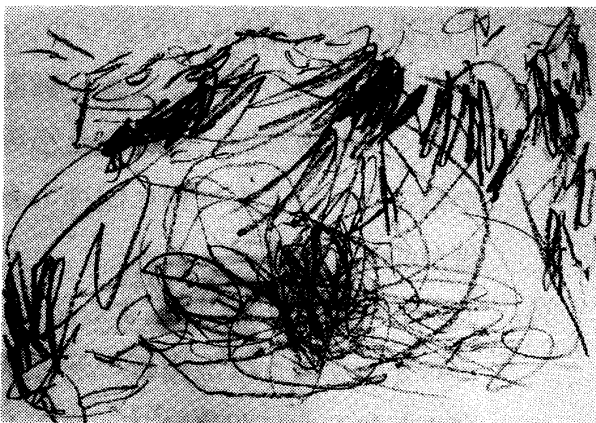


写真1 K児 資料No.3

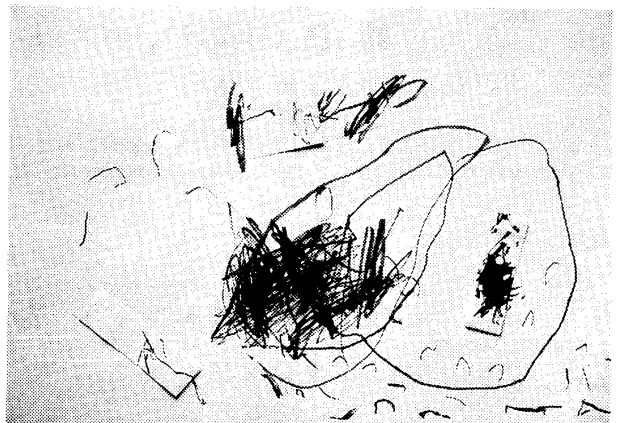


写真2 K児 資料No.6

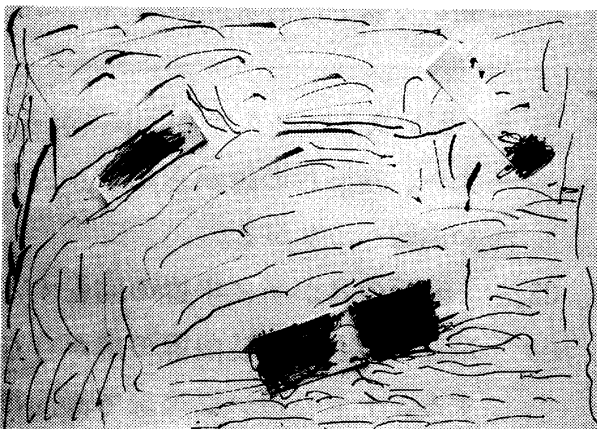


写真3 A児 資料No.13

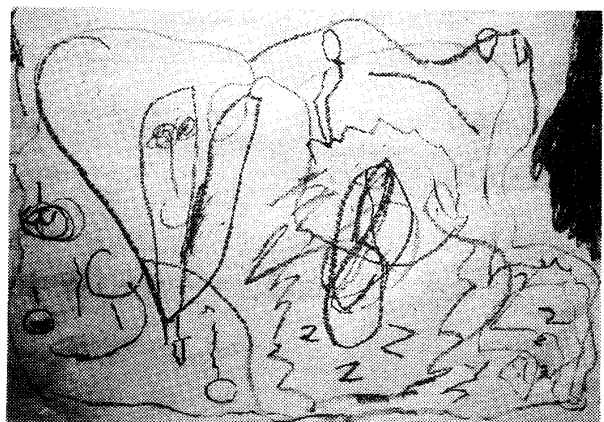


写真4 A児 資料No.15



写真5 S u 児 資料No.18

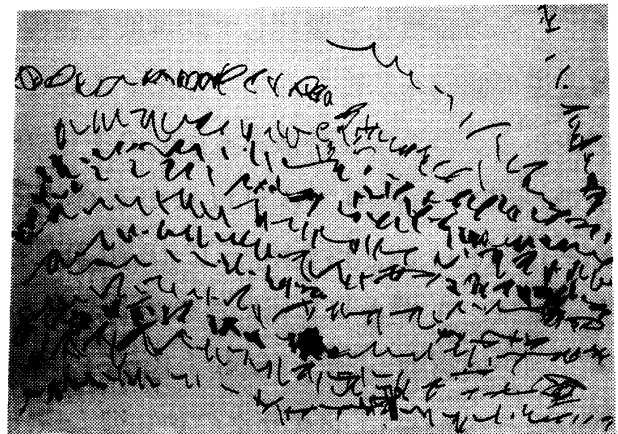


写真6 S u 児 資料No.20

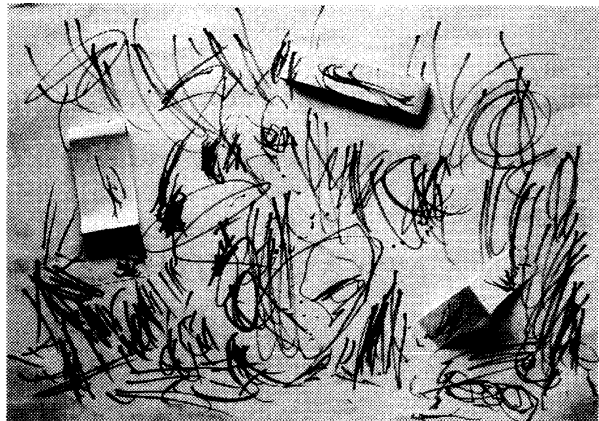


写真7 Y 児 資料No.28



写真8 Y 児 資料No.29

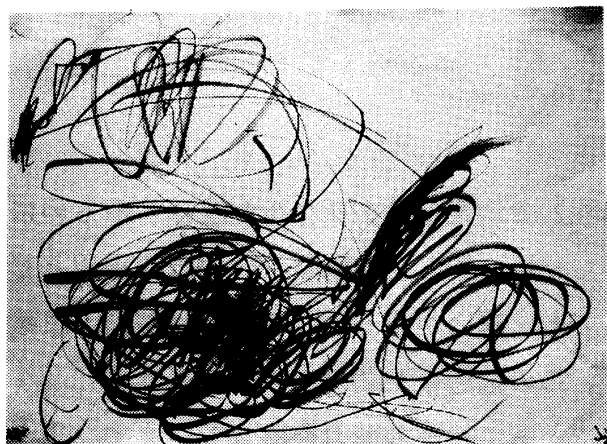


写真9 S a 児 資料No.32

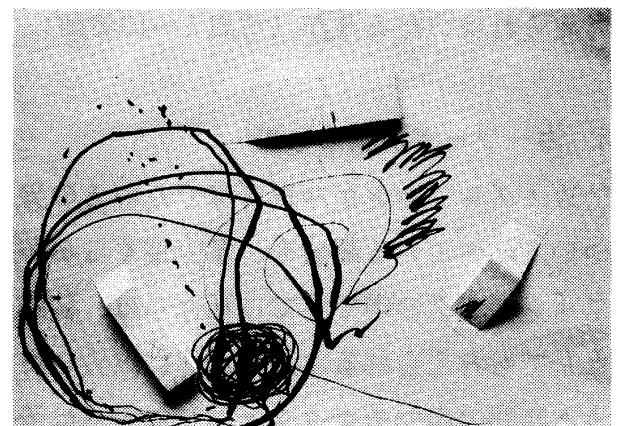
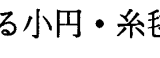


写真10 S a 児 資料No.33

2. キーワードを拾う

これらの特徴を言葉にして読み取る過程で、調査対象の子どもたちが描くスクリブルには共通の傾向を示唆する語が頻出することが分かった。2歳児1名につき相当数のスクリブルからこのような特徴ある傾向のキーワードを見つけることができる。分析した34枚のスクリブルの中で30枚もがこのような語をもち、そのうちの19枚（資料NO.3, 6, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 20, 21, 25, 27, 28, 29, 30, 33）に特徴が顕著であった。被検児別では、A児とS児にこの傾向が多く見られた。その傾向を示唆する語や記号は、

- ・「短い反復線」「点」「回転する小円・糸毬」「のような記号」「ジグザグの触知線」。これらはスクリブルに使用された表現ツールであると思われる。
- ・「繰り返す」「並ぶ」「嵌め込む」は表現行為のプロセスとして現れたと思われる。
- ・「リズム」「添うような」「流れるような」は表現ツールや表現行為が表された状況を示す語と考えられよう。

の3つにグルーピングできる。以上の語や記号は、対象児が描くスクリブルが示す共通項のキーワードを構成するものである。キーワードから「音楽が好きな子ども」に共通してみられたスクリブルの特徴は次の3ポイントにまとめることができる。

- ①小さな記号のような点や線（短い線や反復線・回転する小円・さまざまな記号）を繰り返し使用し、線や形に添って並べたりはめ込んだりした表現。
- ②空間を這うようなジグザグの触知線の存在。
- ③空間を流れるような方向性や、リズムカルな表現ツールの使用。

これらが実に88%以上のスクリブル作品に現れた現実は、なぐりがきの発達過程で2～3歳時期に現れる特徴であるとも言えるが、被検児への偏りは何らかの意味を含むと考えられないだろうか（写真1～10参照）。

3. キーワードが語るもの

W・グレッツィンゲルは『なぐりがきの発達過程』で幼児のスクリブルが意味するものについて述べている部分を、多少長くなるが引用したい。子どもの観照力の根源的現象として「ジグザグの中ですでに私たちは、装飾としても、言いかえると同一要素の並列、反復としても考えられるような形体に出会いました。この継起－空間の中でのジグザグはちょうど時間の中でチクタクと同じです－は子どもにとって独特の魅力を持っています。まもなく彼はたとえば渦巻を輪の列で充たしはじめるのですが、それは脈拍、血液のリズムが沈殿しているように見えます。脈拍と並んで呼吸も、また新しい形体をひき起こすものとして目立ちはじめます。曲線の列が樹木の年輪のように空間に層を重ねます。」⁹⁾と記して

いる。この中でグレッツィンゲルは、同一要素の並列、反復、触知線としてのジグザグが時間のチクタクすなわちリズムであること、渦巻を輪の列で充たす即ち嵌め込む、或は流れを創るといった状況を示している。そしてこれらスクリブルに現れたものを、脈拍、血液のリズムが沈殿していると表現している（図3）。さらに、新たな形体を引き起こすものとして呼吸の要素を上げ、空間に層を成す線を示している（図4）。グレッツィンゲルが指摘する脈拍、血液のリズムと関係するスクリブルの要素は、音楽が好きな子どもの描いたスクリブルに頻出した記号や語に表したキーワードと酷似している。また、空間に流れ重なる線はフォルムを形成しはじめ、グレッツィンゲルが言う呼吸線を思わせる。

以上の結果、本研究の対象児が描いたスクリブルに見える表現の根にあるのは、色や形による表現以前の、人の身体の「脈拍のリズム」とフォルムを探索するプロセスで線を触発する「呼吸」と考えられる。

IV 音楽と共有する表現の根

1. 「かかわる」行為

0歳児が近くにあるティッシュペーパーの箱に手を伸ばし、つかんでペーパーを引っ張り出す。もう一回、もう一回と同じ行為を繰り返す。つかむ、引っ張る、繰り返すは0歳児がティッシュペーパーとかかわる姿である。ティッシュペーパーは「もの」として子どもがいる空間に存在を示し、子どもはもの=素材とかかわることで造形行為をしているのである。芸術家が素材を探究していくプロセスそのものに興奮することがしばしばあるが、子どもがものとかかわる姿は、彼らがものや空間を探索することに興味をもつことと同質

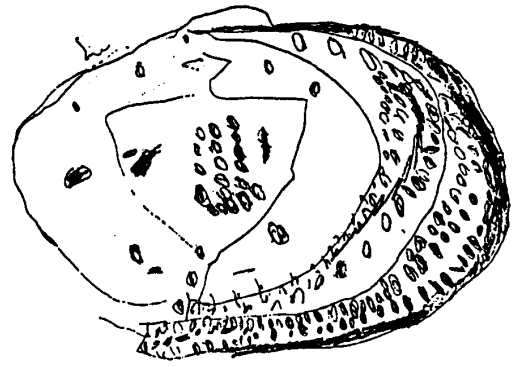


図3 脈拍の刺激による小さな円の並列

3歳の終り『なぐりがきの発達過程』より p.37

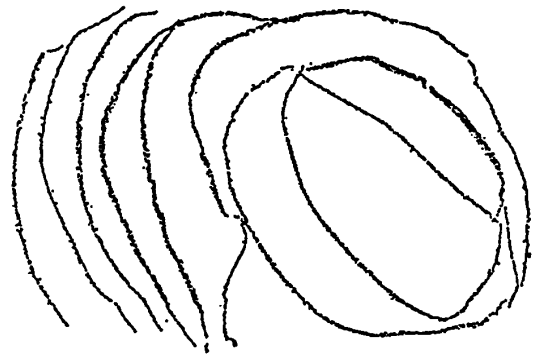


図4 呼吸によって触発された空間の線

4歳の初め『なぐりがきの発達過程』より p.38

のものと考えられる。造形とは0歳から始まるものとかかわる行為であり、ものを変化させる行為である。そして乳児がかかわる身近なものにとどまらず、粘土・金属・絵の具・紙など素材＝ものを探求し、造形要素を駆使してこれらを秩序だて、組織化しようとする。造形表現は必ずしも何かを表していなければならないものではなく、その根底にある行為、「もの」にかかわることである。

では、音楽は何を表現するのだろうか。ジョン・ペインター、ピーター・アストンは『音楽の語るもの』の中で次のように述べている。「音楽は、人間の内に存在するもの、素材の操作・秩序づけ自体の中に存在するものである。」「音楽の素材は音と沈黙（sound and silence）である。言葉・絵の具・粘土・ワイヤー・金属・ポリスチレンなどが探求されるのと同じように、音と沈黙も探求されるのだ」と。また、「音楽というものは必ずしも旋律がなくてはならないというわけではなく、「表現意図にしたがって音と沈黙を組織することである」と言う。そして、「絵画は絵の具‘にかかわる’ものであり、音楽は音に‘かかわる’ものである」と結論している。⁹⁾

かかわる素材の違いはあるが、探求のプロセスにおける興味と興奮は充分それぞれの表現たり得ている。かかわる行為そのものが造形であり音楽であることから、これを表現の根のひとつと考えたい。

2. 呼吸と脈拍

スクリブルの中に呼吸に触発されてフォルムを形成していく線と、ジグザグで現れるような脈拍のリズムを感じさせる点や記号が存在することは、先の調査から確認できた。音楽の世界で「人間が持っている一番基本的な資源を素材として音楽を作る」場合、「その資源とは、私たちをとりまく沈黙であり、沈黙のなかから聞こえてくる物音である」と言う。その物音こそ「自分自身の規則正しい呼吸音」であり、人間の身体に宿るもうひとつの基本的な音のパターン、基本的な拍として音楽の素材とすることができる、心臓の鼓動である。J・ペインター、P・アストンはプロジェクト2、「体のなかにある音楽」で呼吸と脈拍をこのような形で素材化している。¹⁰⁾

子どもの音楽の世界ではどうだろう。小学生の自由な曲づくりを通じて子どもの音楽の世界を解いた小島律子、高橋陽子は子どもが音と戯れるときの柱となるものとして音色とリズムをあげ、リズムの原形をなす枠組みとして「ウェーブ」という概念を用いて説明しようとした。子どもが音を打ち鳴らすときの二種の方法、「点によってトントンと時間をきざんでいくようなイメージ」と「音がとぎれないように細かく連ねていくことによって、音の流れを生み出していきやり方」をあげ、前者を「パルス（脈拍）型」、後者を「持続型」とし、ウェーブの形状の上と下に頂点があるものをパルス・脈拍としている。¹¹⁾ スク

リブルにみる心拍の点や細かい記号の並列が浮かぶ。一方、ウェーブを流れるようにつなぐ持続型の線はスクリブルの呼吸線を彷彿させるものである。

呼吸と脈拍、これは身体の中の表現の根であろう。

3. 共有する表現の根

造形と音楽、素材や表現技法が異なり、表面の様相は互いに別の表情を見せている。しかし、造形や音楽を素材としてのものや音にかかわる行為として捉え、根源的に同一の土壌をもつものとして受け止めたとき、ここにひとつの表現の根が存在することがわかる。もうひとつの表現の根は本研究で扱った34枚のスクリブルを通じて、最も顕著にみえた身体の中に潜む脈拍と呼吸のリズムであった。脈拍と呼吸はスクリブルにおいて、あるいは音楽の世界でも表現に関与し、表現を触発し、表現ツールを生み出し、表現素材にもなっているのである。人間の身体のリズムこそ一番基本的な共有する表現の根であった。表現を情緒や感性の世界のできごととして、説明不能のエリアとしてひとまとめにできるものではないことをも示しているようにも感じる。

V おわりに

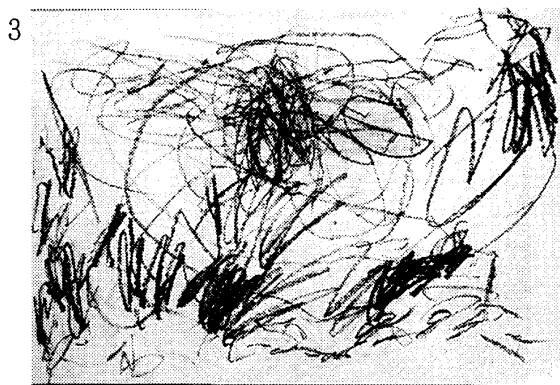
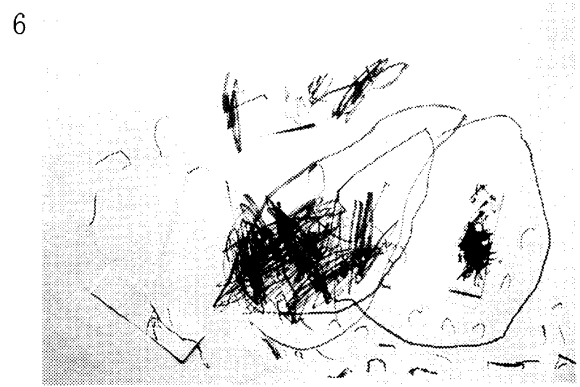
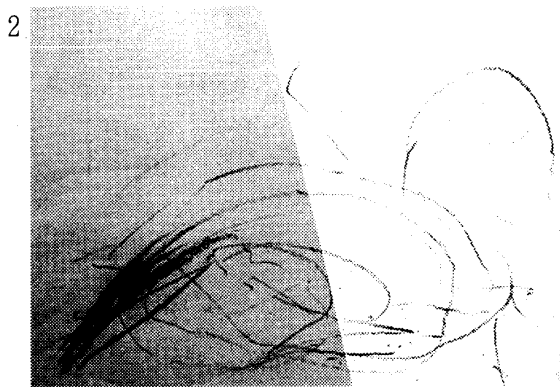
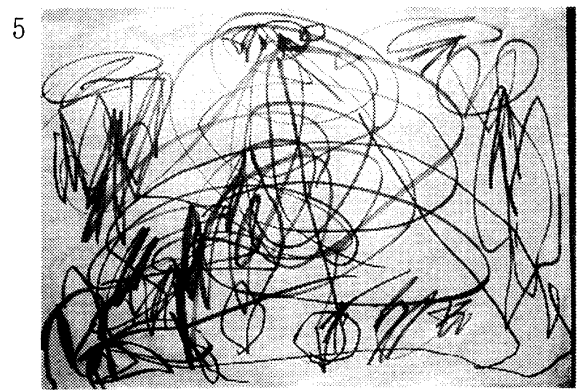
1989年、90年に改訂された幼稚園教育要領並びに保育所保育指針の領域表現の解釈はすでに一般化している。子どもの生活と感性、子どもの感性と表現方法の相関関係への理解は浸透したかにみえる。しかし、それぞれの表現方法の独自性を考えたとき、相関関係を根源的に納得するものに出会うことができなかつたというのが実感であった。総合化を理論づけるために無理に共通項を探ろうとしたわけではないが、最も原初の表現である乳児のスクリブルをサンプルに、音楽表現との共通項を探る手がかりを求めようとしたのであった。その結果、今回の調査では呼吸と脈拍のリズムという手がかりを得た。本稿の対象児はあらかじめ選択した「音楽が好きな子ども」であったため、特に音楽を好まない子どもとの比較がなされていない。これらの調査が子どもの表現理解の一助になればと考え、現在、調査対象のK保育園2歳児のスクリブルを継続的に収集中である。本調査は予備調査的な段階であり、ここで得た手がかりをもとにスクリブルを通じて表現の根をさらに探究することが今後の課題である。

引用・参考文献

- 1) ローダ・ケロッグ著 『児童画の発達過程』 深田尚彦訳 黎明書房 1962. p.11
- 2) ローダ・ケロッグ著 前掲書 p.18
- 3) W・グレッツィンゲル著 『なぐりがきの発達過程』 鬼丸吉弘訳 黎明書房 1978. p.28
- 4) W・グレッツィンゲル著 前掲書 p.28
- 5) W・グレッツィンゲル著 前掲書 p.30
- 6) Ph・ワロン、A・カンビエ、D・エンゲラール著 『子どもの絵の心理学』
加藤義信、日下正一訳 名古屋大学出版会 1995. p.59
- 7) 奥美佐子、吉森恵著 「2歳児が生活のなかで示す興味と表現の研究2 -自発的音楽行動を示す時と場について-」 日本乳幼児教育学会第5回大会研究発表論文集 1995. pp.20,21
- 8) W・グレッツィンゲル著 前掲書 pp.37,38
- 9) ジョン・ペインター、ピーター・アストン著 『音楽の語るもの』 山本文茂、坪能由紀子、橋都みどり訳
音楽の友社 1982. p.25
- 10) ジョン・ペインター、ピーター・アストン著 前掲書 p.36
- 11) 小島律子、高橋曜子著 『子どもの音の世界』 黎明書房 1995. p.96,p.101

スクリブル資料（No.1～34）

K児 H4・5・14 男

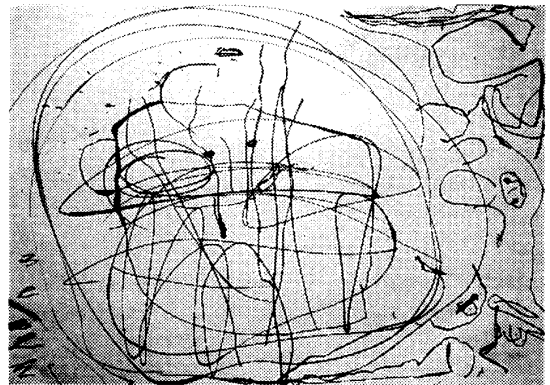


A児 H・4・6・15 男

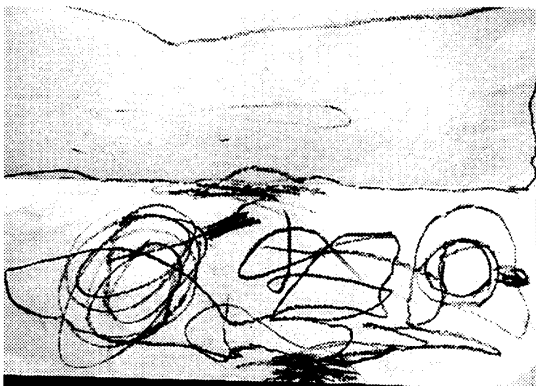
8



12



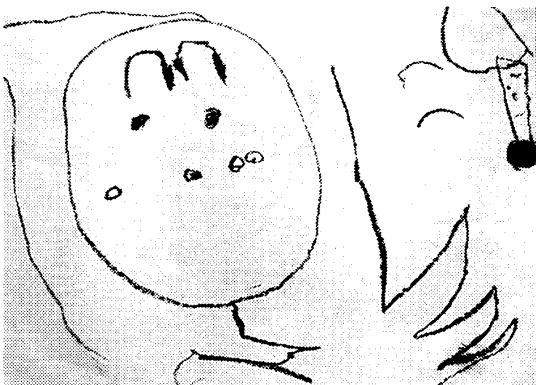
9



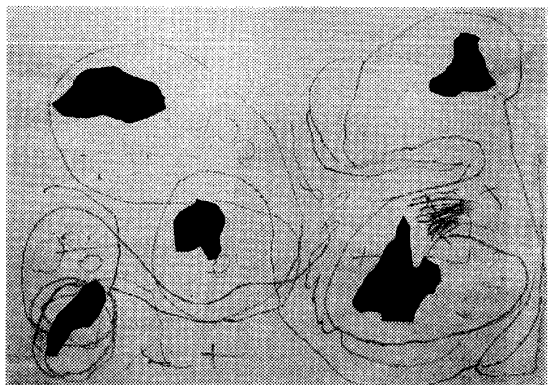
13



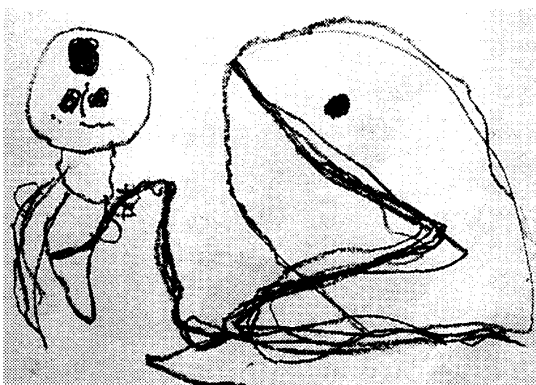
10



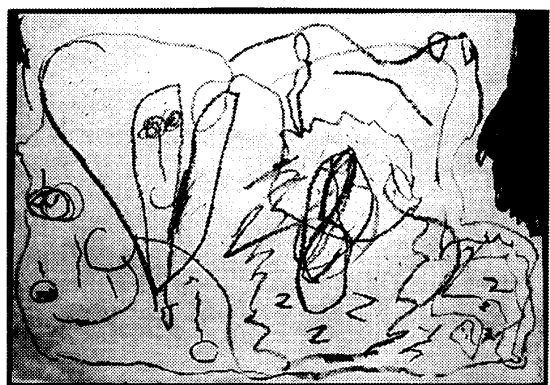
14



11

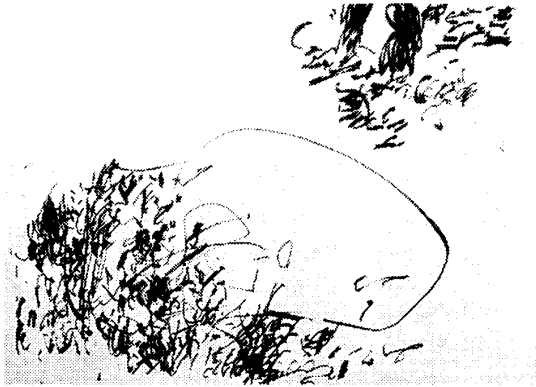


15

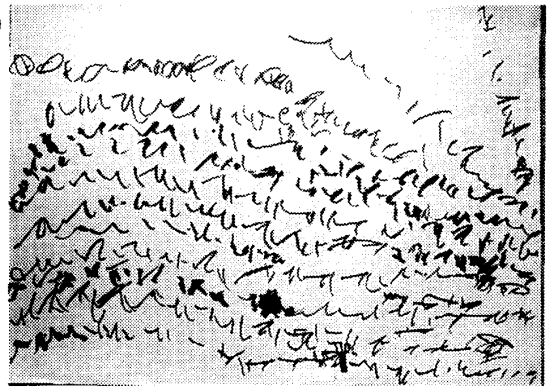


Su児 H・4・7・13 女

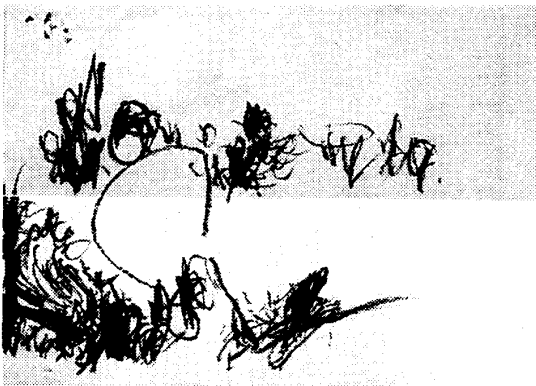
16



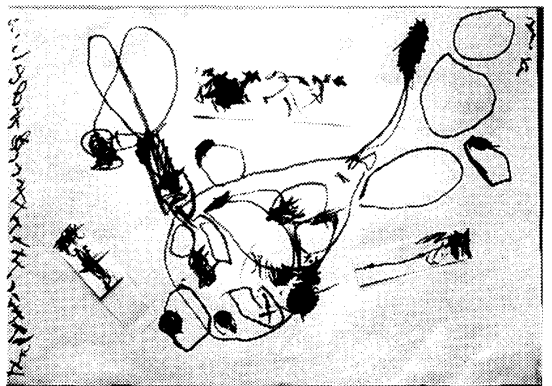
20



17



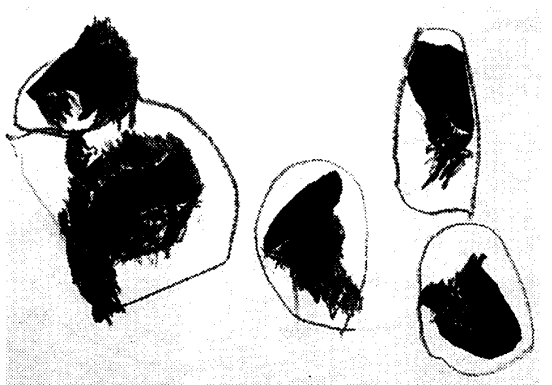
21



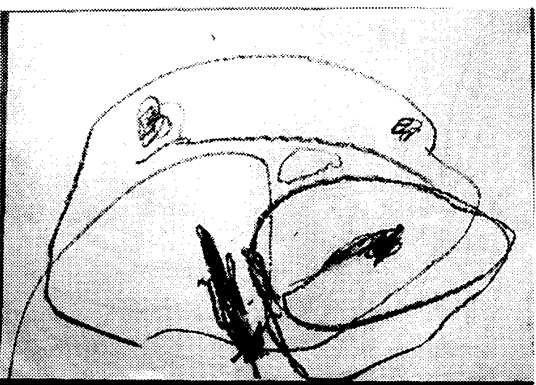
18



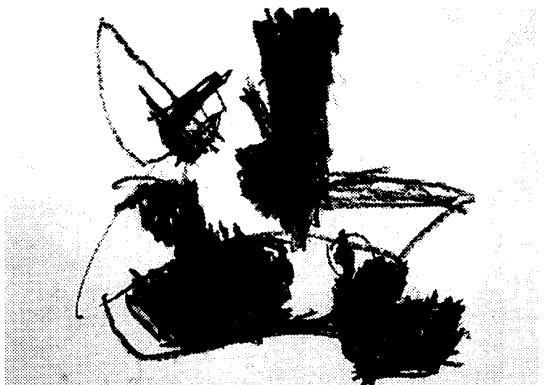
22



19

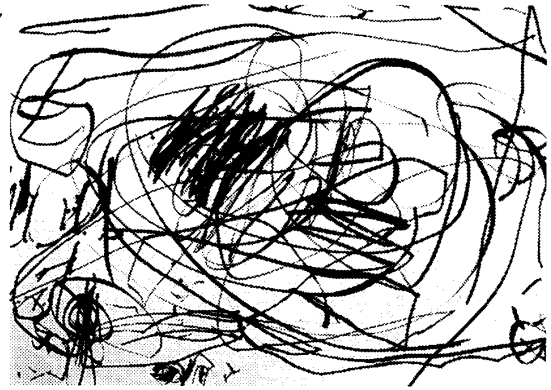


23

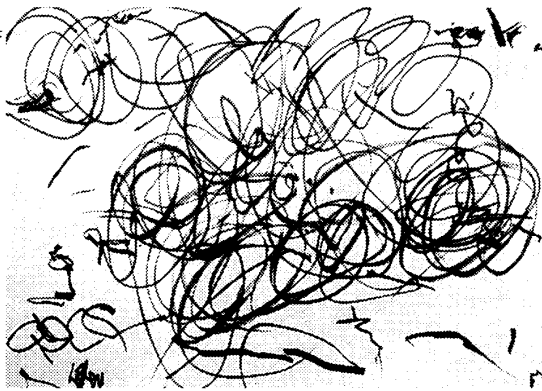


Y児 H・4・10・2 女

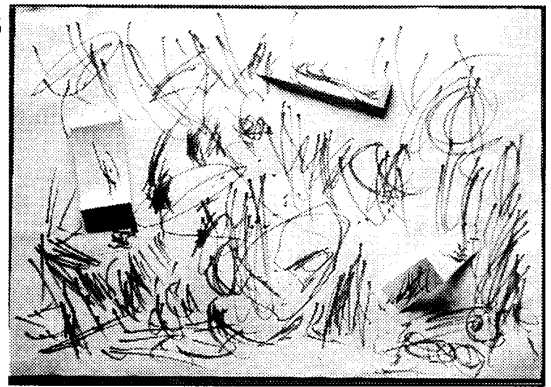
27



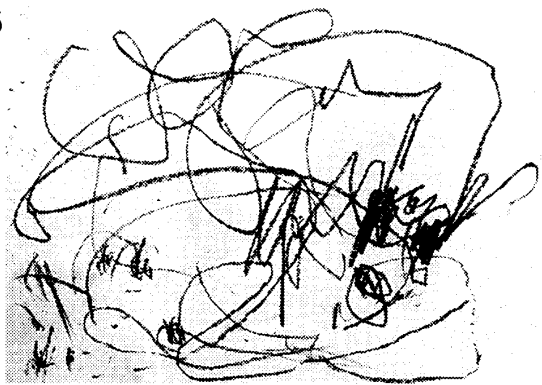
24



28



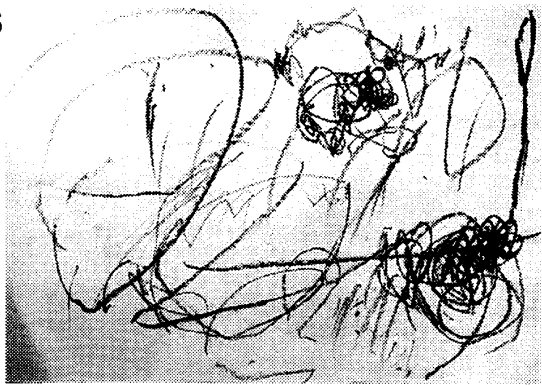
25



29



26

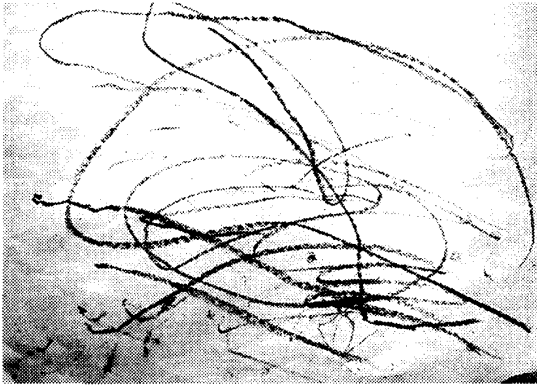


30

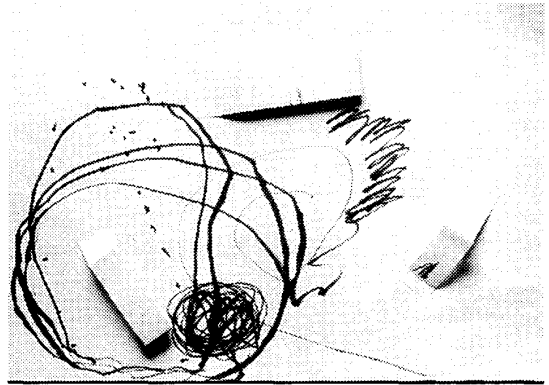


Sa児 H・4・10・2 女

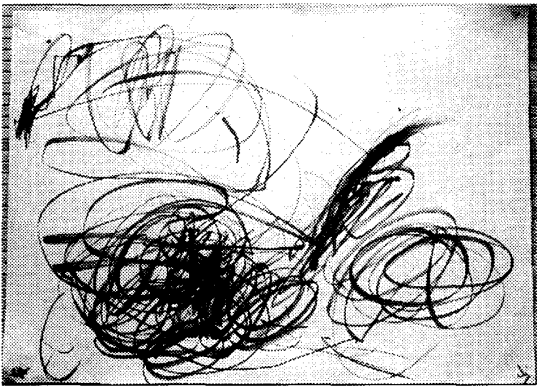
31



33



32



34

